

能登半島地震発生域における長期テクトニクスでの課題と断層掘削

大坪 誠（産業技術総合研究所）

ポイント

- 能登半島での現在の応力場への転換時期とその継続期間の解明が課題
- 陸上断層掘削による断層近傍の流体圧・化学・摩擦特性の解明が地震予測に貢献
- 能登半島地震の背景理解には地殻変動・地震活動・断層帯流体観測の統合が必要

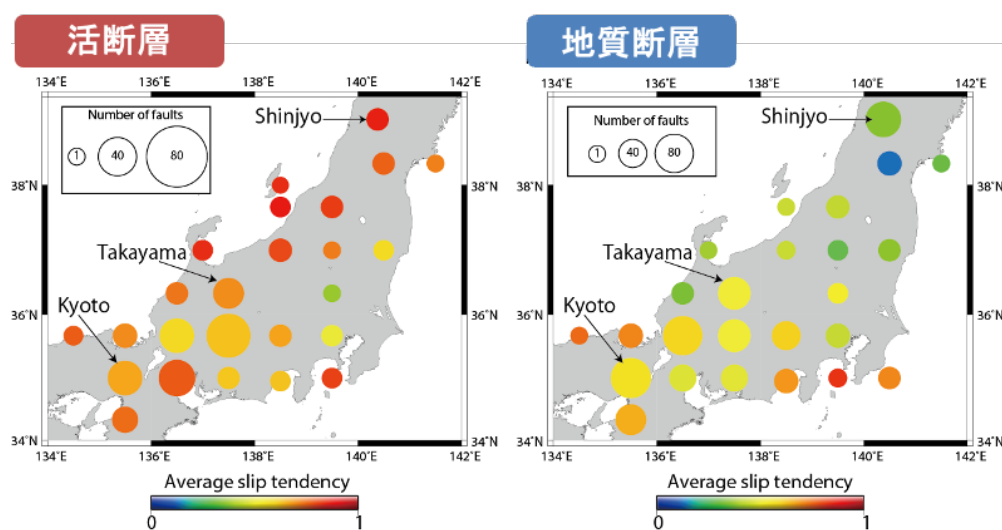


図 1. 東北地方南部から近畿地方の活断層と地質断層における現在の応力に対するスリップテンデンス（Miyakawa and Otsubo, 2015, 2017）. 活断層よりも地質断層のほうが現在の応力でのスリップテンデンスは低く、能登半島周辺も同様の傾向である。

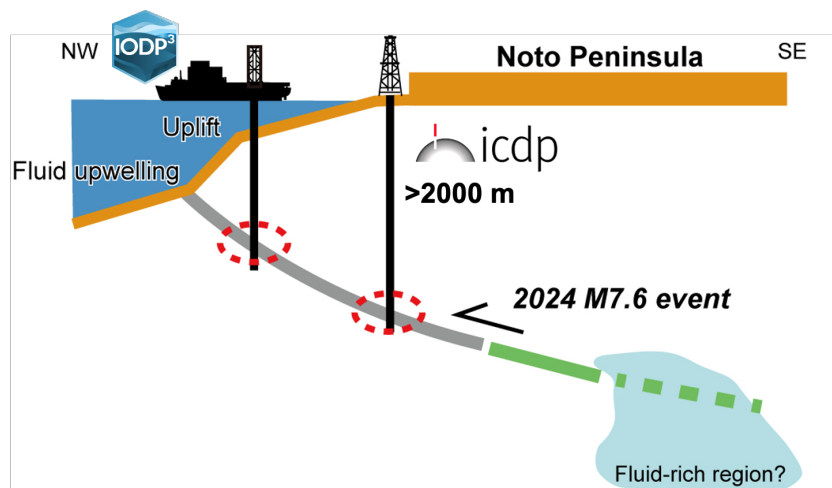


図 2. 能登半島陸上科学掘削計画「NEPTUNE 計画」の概要. NEPTUNE 計画では、2024 年能登半島地震の断層面近傍の流体・ガス採取とコア試料分析を行い、2024 年能登半島地震で活動した断層周辺での流体圧・岩石の化学反応・断層面の摩擦特性などの解明を目指す。

産業技術総合研究所 大坪 誠 資料